

---

# FAIRYTAILの世界へ

短剣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FAIRYTAILの世界へ

### 【Nコード】

N2645S

### 【作者名】

短剣

### 【あらすじ】

神の不幸で死んだ主人公はお詫びとしてFAIRYTAILの世界に転生する。

\*\*\*この小説は二次創作です。ご都合主義・オリ主最強・不定期更新などの成分が含まれているのでご注意ください。

## プロローグ

今俺の目の前には神様と名乗る少女がいる。何でも俺は女の子が車にひかれそうになったのを助け、車にひかれてしまい、死んだそう  
だ。

「で何で俺がここに居るわけ？」

「いやそれは・・・」

「俺は助かる筈だったと言わないよな？」

「ははは・・・」

「どうしてくれんだよ！！まだやりたいことあったのに。」

「だからここに連れてきたんだよ。」

「転生させてくれんの？」

「そうだよ。」

「ふゝん。じゃあFAIRYTAILの世界ね。」

「それだけでいいの？」

「強いて言えば記憶がなくならないようにしてほしいのと、病弱な体は勘弁。」

「本当にそれだけでいいの？他にFAIRYTAILの世界の魔法を全部使えるようにもできるけど？」

「そんなことしたらつまらない。その代わり、無から物質を作り出す魔法と、Fateの無限の剣製、なんかオリジナルの滅竜魔法を使えるようにして。」

「十分チートな気がするけどいいか。それじゃあ送るよ。」

「おう。」光に包まれ俺の意識は切れた。

## 転生初日

「うつ、ここは？」目が覚め周りを見ると、知らない場所にいた。  
「転生できたみたいだな。傷を手当てした跡があるけど何か怪我でもしたか？」

「あら、気が付いたみたいね。」話しかけてきたのはフェアリーテイルの看板娘・ミラジエンだった。

「あの・・・俺は一体？」

「女の子なのに俺って珍しいわね。あなたが傷だらけの体でギルドの前に倒れてからナツ達が医務室に連れてって治療したの。」

「えっ？」女の子だって？

「何も覚えてないの？」何か勘違いされてるが、

「記憶が、混乱してて。覚えているのは、自分が使える魔法だけで・・・」

「！あなた魔法が使えるの？だったらフェアリーテイルに入らない？記憶喪失だったらここで魔法を使っていくうちに思い出すかも知れないし・・・」

「えっ？いいんですか？」

「あなたなら皆大歓迎してくれると思うわ。」

「ありがとうございます。」

「ミラ、入ってもいいか？」

「いいわよ。」

「気が付いたんだな。」

「あい。」

「猫が喋った！」

「そんな事より何でそんな服着てんだ？」今着てる服はフードがついてるパーカーか。

「えっつと何でだったかな？」

「ナツこの子記憶が混乱してるみたいなの。」

「ナツ？俺を助けてくれた人？」

「そうだぞ。」

「服の事なら覚えてる。」なぜか服の事だけ記憶が出てきた。

「そう。」

「確か何かがあるから隠さないといけないって親に言われた。信用できる人にだけ見せなさいって。」

「そうか。」

「でもナツならいいよ。」

「本当か？」

「助けてくれたから。」パーカーを脱ぐと、ナツ達が絶句してる。

「どうしたん・・・何これ！！??」鏡で見ると、猫耳と尻尾が生えていた。

## チーム結成

「あれ？ナツどこ行くの？」

「ルーシイの家。」

「面白そう ついてっていい？」

「いいぞ。」

「ありがと。」

ルーシイ side

「んゝ、いいトコ見つかったなあ」

私は今お風呂に入っている。

「7万」にしては間取りも広いし、収納スペースも多いし…etc

…」

「そして何より一番素敵なのは…」

主人公 side

「ここがルーシイの家？」

「住所的にここの筈だ。」

「あい」

「じゃ入ろうか。」

玄関の扉を開けたが誰もいなかった…

「誰もいないね。」

「風呂に入ってるんじゃないかな？・・・少しこの部屋で待とう。」

「そうだな。」

「…白い壁……木の香り……」

「お、こっちくるぞ」

「いくら一人とはいええあんな大きい独り言は無いよね」

ハッピーが言う。

「そして何より一番素敵なのは……」

そしてルーシイは扉をあける

「よっ、ルーシイ」

と、ナツ。

「大きい独り言だね」

と、ハッピー。

「ルーシイ、どんまい。」

と、僕。

「あたしの部屋ーっ！！！」

と、ルーシイ。

「何でアンタ達がいるのよー！！」

と、ナツとハッピーに回し蹴りをくらわす。

「僕はナツがルーシイの家に行くからついてきた。」

「ルーシイの家が気になったから。」

「だからって勝手に入ってきていい訳！？親しき仲にも礼儀ありつて……」

一人称が僕になってるのはミラさんに言葉づかいを治せと言われたからだ。そのときのミラさんの顔は思い出したいくらい怖かった。

「まだ引っ越してきたばかりで家具もそろってないのよ。遊ぶモンなんか何もないんだから紅茶のんだらかえってよね」

「残忍な奴だな」

「あい」

「紅茶飲んで帰れって言うただけで残忍……って……」

「あ！そうだ」

ナツが思いついたように声をあげる。

「ルーシイの持ってる鍵の奴等、全部見せてくれよ」

「あ、僕も気になる」

「いやよ！すぐく魔力を消耗するじゃない。それに鍵の奴等じゃなくて星霊よ」

「ルーシイは何人の星霊と契約してるの？」

「6体。星霊は1体、2体って数えるの」

「へ〜。」

「そーいえばハルジオンで買った小犬座のニコラ、契約するのまだだったわ。……ちようどよかった！星霊魔導師が星霊と契約する流れを見せてあげる」

「おおっ！」

「血判とかおすのかな？」

「いたそうだなケツ」



「なぜお尻…まあいいわ。とりあえず今から星霊との契約するから見てて」

「我…星霊界との道をつなぐ者…汝…その呼びかけに応え門をくぐれ…」  
ゲート

そして鍵の先端から光がでる。

「おお…」

「開け！小犬座の扉！！ニコラ！！！！」

目の前が光と煙で真っ白になる。

出てきたのは、

「プーン！！！！」

真っ白な体をして鼻にドリルみたいなのがついてる謎の生命体だった。

『ニコラー！！！！』

皆八モる。

「ど…どんまい！！」

「失敗じゃないわよー！！」

「まあまあ、早く契約しようよ。流れも知りたいし」

「うん…じゃ、契約に移るわよ」

星霊魔導士の契約方法はいたって簡単なものだった。

ただ呼び出している日を聞くだけだ。  
ただどそれは契約を重んじる星霊魔導士にとってはとても大切なものののだ。

「はいっ！契約完了！！」

「ププーン！！」  
ルーシィとニコラの契約が完了した。

「そうだ！名前決めてあげないと！」

「あれ？ニコラって名前じゃないの？」  
ハッピーが問う。

「それは総称。……そうだ！おいで！プルー！」

「プーン！」

「プルう？」

と、ナツ。

「なんか語感がかわいいでしょ。ね！プルー」

「プーン」

「そういえばプルーって小犬座なのにワンワン鳴かないんだ」

「それもそうだな」

ハッピーとナツが言う。

「いや、ハッピーもにゃーにゃー鳴かないじゃない」

そしてプルーは何か伝えるかのように踊り出す。

「ん？なんだなんだ？」

最後に両手で丸を作る。

「プルー……お前良いこと言うなあっ……」

「なんか伝わってるし……」

「うーん……ルーシィは頼れるし、いい奴だ……」

そしてナツは何か考え始めた。

「ナツ？どうしたの？」

ハッピーが言う。

すると突然、

「よし！決めた！！プルーの提案に賛成だ！」

「？」

そしてナツはこう言った。

「オレたちでチームを組もう！！」

「チーム？」

「あい！！オイラが説明するね」

ハッピー先生のフェアリーテイル講座出張版が始まった。

チームというのは、

ギルドのメンバーの中でも特に仲のいい人同士が集まって結成するものらしい。

また、一人では難しい依頼もチームを組めば負担が減る、ということらしい。

「いいわね！それ！！おもしろそう！」  
と、ルーシィは賛成した。

「面白そう 僕も入る。」

「よおおし！決定だーっ！！早速仕事いくぞーっ！！」

「せっかちなんだから」  
と、何故か上機嫌なルーシィ。

仕事の内容は…

エバルー公爵の本を一冊取ってくる、という内容だ。  
ちなみに20万」。

ただいま金髪のメイド募集中だそうだ。

「はめられたーっ!!」

ルーシイが言う。

「どんまい、ルーシイ。…金髪じゃなくてよかった  
ちなみに私の髪はショート黒髪だ。

「なにいつてんだ？もつとよくみろよ」

ナツは募集要項の下の方を指さす。

今は黒髪のメイドさんも募集中、なんて事がかかれていた。

「…僕まだ5歳なんだけど。」

「…そうだったの（か）!!!???」

## 記憶前編

「ナツ、見つけたか？」

「いや、燐どこ行っただ？」

「んな事よりエルザが来るまでに見つけ・・・」

「お前たち何をしてるんだ？」

「「エルザ！」」

「んっ？燐はどうした？」

「いなくなっちゃった。」

「燐が急に起きたと思ったらそのままどこかに行ったんだ。」

「燐・・・」

## SIDE 燐

（燐大丈夫？）

（大丈夫じゃないかも。）

（記憶消すんだったら消せるよ？）

（せっかく記憶が戻ったんだから消したくないよ。）

（燐・・・）

（仕事ナツ達で行ってるのかな？）

（皆燐の事探してるよ。）

（転生するときに調子に乗るからこんなことになるんだよね。）

（燐、魔力借りるよ？）

（勝手にして。）

体から力が抜ける感じがし、次に、誰かに抱きしめられた。

「っ！放せ。」

「燐ごめんね。」

「何で謝るの？」

「私のミスで燐が死んじゃったから。」  
「もういいよ。このまま旅に出ようかな。」  
「フェアリーテイルはどうするの?」  
「もう誰も信じない。」  
「燐・・・」  
「だって、僕の親が死んだ後、村の人は冷たくなったしね。」  
「・・・」  
「どうせ皆も冷たくなるよ。」  
「燐、見つけたぞ!」  
「ナツ・・・」  
「帰るぞ。」  
「僕は帰らない。」  
「燐!？」  
「どうせ皆村の人と一緒にになるよ。」  
「記憶が戻ったのか!」  
「戻ったよ。だから帰りたくないんだよ。」  
「どうしてだ?」  
「それは・・・」

## 記憶中編

「僕が生まれる前、父さんと母さんが化け猫を討伐したんだ。」

「でも、化け猫が死ぬ直前に母さんに呪いをかけたんだ。」

「その呪いは生まれて来る子供が化け猫の特徴を受け継ぐものだったんだ。」

「隣は…」

「分かった？生まれて来た子供が僕。化け猫の特徴を受け継いでね。」

「生まれた時、両親以外に村人がいたんだ。皆僕を殺そうとしたんだけど、両親が守ってくれたおかげで殺されずにすんだけどね。」

「それで両親と3人幸せに暮らしてただけ、両親2人で仕事に行った時、ドラゴンに会って殺された。」

「その時から村人全員の態度が変わった。」

「会ったたびに石を投げられたり、罵声を浴びせられた。酷い時には犯されそうになった。魔法が使えたから大丈夫だったけど。」

「それでこんな生活が続くくらいなら村を出た方が良いと思って村を出たんだ。」

「村を出てしばらくたった時に誰かに襲われて怪我した時に会ったのがナツだったんだ。」



## 記憶後編

「そのどこが戻らない理由になるんだ？」

「此処まで言っただけまだ分からない？フェアリーテイルの皆も同じになるからだよ。」

「憐、それ本気で言ったのか？」

「そうだよ。」

そう言った瞬間、ナツに殴られた。

「なにすんだ！！」

「ギルドの皆はそんな奴等じゃねえ！！」

「ナツに何が分かるんだよ！！」

「俺も親がいねえ。」

「！？」

「ドラゴンのイグニールに言葉と魔法を教えてもらった。急に居なくなっちゃったけど、爺っちゃんに誘われてフェアリーテイルに入った。」

「皆優しくて家族みたいなもんだからそれを悪く言う奴は許さねえ！！」

「ナツ・・・」

（憐、あなたが人を信じられないのも分かるけど、この人達は裏切らないじゃない？）

（そうかな？）

（絶対とは言えないけど、憐を探してくれたんだよ。信じてあげたら？）

（そうだね。）

「ナツ、ごめん！」

「せっかく探してくれたのに酷い事言っちゃって。」頭血が昇つてみたい。」

「でももう大丈夫！ナツに殴られたおかげで目が覚めたよ。」

「それじゃあ帰るか。」  
「うん!!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2645s/>

---

FAIRYTAILの世界へ

2011年11月21日11時37分発行